

Cucurbit aphid-borne yellows virusによるメロン病害の発生について

病原ウイルス名：Cucurbit aphid-borne yellows virus (CABYV)

発生作物：メロン

1. 発生確認の経緯及び県外での発生状況

- (1) 令和7年5月に鹿行地域の施設栽培メロン圃場において、葉に退緑及び黄化症状を示す株が認められた(写真1～3)。
- (2) 茨城県農業総合センター園芸研究所において、RT-PCR法による検定及びその増幅産物の塩基配列を解析した結果、CABYVの感染が確認された。
- (3) 本ウイルスは、1988年にフランスにおいて、キュウリやメロン等で初めて発生が確認され、それ以降、海外40か国以上で主にウリ科野菜に被害を及ぼしている。国内では、令和6年に京都府のキュウリで初めて報告され、その後、滋賀県でキュウリ及びメロン、福島県でキュウリ、大阪府でキュウリでの発生が報告されており、今回の本県での報告は国内5例目となる。

2. 被害の特徴

- (1) 葉の一部もしくは全体に黄化症状を示す(写真1、2)。さらに症状が進むと、株全体の葉が黄化する(写真3)。新葉や脇芽等の若い葉には症状が見られないか、時間が経ってから黄化が生じる。

3. 伝搬方法等

- (1) 本ウイルスは、海外ではワタアブラムシやモモアカアブラムシ等のアブラムシ類により媒介されると報告されており、滋賀県の報告では、メロンでのワタアブラムシによる媒介が確認されている。なお、汁液伝染、種子伝染及び土壌伝染は確認されていない。
- (2) 媒介虫は、罹病植物を吸汁することで本ウイルスを保毒し、一度ウイルスを獲得すると永続伝搬(長期間あるいは生きている限り媒介できる)するが、経卵伝染はしないとされている。
- (3) 感染すると落花が多くなり、1株当たりの果実数が減少することで、メロンでは40%、キュウリでは51%減収した事例が海外で報告されている。

4. 防除対策

- (1) 発病が認められた株は伝染源となるため、速やかに抜き取ってビニール袋等に入れて密封し、株を腐らせてから処分する。
- (2) 本病に適用のある農薬はないため、ウイルスを媒介すると考えられているアブラムシ類の防除を徹底する。
 - ① 苗からアブラムシ類を持ち込まないよう注意する。
 - ② 施設栽培では、育苗圃及び本圃の施設開口部に目合い0.8mm以下の防虫ネットを張り、施設内へのアブラムシ類の侵入を防ぐ。
 - ③ 施設内及び圃場周辺の雑草はアブラムシ類の発生源となるので、除草を徹底する。
 - ④ 定植時等に粒剤やかん注剤を施用し、アブラムシ類の発生を予防する。

- ⑤アブラムシ類の発生が確認された場合は薬剤防除を実施する。
- ⑥アブラムシ類の薬剤抵抗性の発達を防ぐため、IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ⑦施設栽培では、アブラムシ類を周辺に分散させないため、栽培終了後にすべての株を抜根し、施設を密閉してアブラムシ類を死滅させる。

5. 参考文献

- (1) Lecoq *et al.* (1992) *Plant Pathology* 41: 749-761.
- (2) 令和6年 発生予察特殊報第1号 (京都府)
- (3) 令和6年度 病害虫発生予察特殊報第2号 (滋賀県)
- (4) 令和6年度 病害虫発生予察情報特殊報第3号 (福島県)
- (5) 令和6年度 病害虫発生予察特殊報第1号 (大阪府)



写真1 葉の一部の黄化症状



写真2 葉の全体の黄化症状



写真3 株全体での黄化症状